

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

華僑華人を見つめる目 (特集・華僑・華人研究の視座と方法：華僑学の試み)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 天璽 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5255

華僑華人を見つめる目

陳 天 璽

はじめに

一部の華人企業家やビジネスマン（華商）が広げるダイナミックな経済活動から、しばしば、華僑華人をエスニックなアイデンティティで繋がったビジネス・ネットワークを有する集団と見なすことが多い。それは「華人ネットワーク」と呼ばれている。事実、華僑華人は世界に散在しながらも、一定の中華文化を保持し、支え合っているように見える。しかし、それが彼らの本当の姿であり、すべてなのであろうか。

こうした、これまでの華僑華人に対する認識は、観察者によって「創造（想像）」された華人共同体」のイメージで

あつたといえる。しかし実は、彼らはそのイメージにおさまらない「世界」を有している。華僑華人を「中華世界」でしか見ないという視点は一面的であり、その実態を正確に把握できていない。

華僑華人を観察する際、いくつか留意すべき点が挙げられる。それは第一に、彼らは「華」でまとめられるように、「中華世界」を共有しているがために一体のものとしてカテゴライズされるが、しかし、その「中華」のアイデンティティは求心力を持ったものであるのみならず、分散作用を引き起こす力学をも有しているという点である。第二に、「華人ネットワーク」は、世界的な組織力を持ったものであると思われるが、実際は極めて分散したものである。しかも個人的な繋がりの結合によって形成されている

ものである。第三に、華僑華人は、ディアスポラを経験し、その歴史的、社会的、文化的背景に影響され、独特な時空の感覚を有している。彼らは、移民として生存するため、またビジネスのためなど、国や文化のボーダーや業界のボーダーに臨機応変に対応し、頻繁に越境している。したがって、彼らのアイデンティティは重層的で機會主義的であるなどの特徴を持っている。そうしたアイデンティティから形成されるネットワークは、後に述べる「虹のメタファー」⁽¹⁾に見られるように自然現象である虹の性質に類似している。また、特に注意すべき点は、華僑華人は虹と同じように、観察者の視角によって様相が変化するということである。

本論では、さまざまなボーダーを越境する華僑華人に注目し、彼らのアイデンティティやネットワークの実態を分析するとともに、華僑華人を見る視角にも注目する。華僑華人だけではなく、観察する側をも視野にいれることにより、華僑華人の実態とイメージ、そしてその相違から生れるダイナミズムなどを立体的に考察する。

一 越境するアイデンティティとネットワーク

(一) 「華人ネットワーク」論の由来Ⅱ世界華商大会

「華人ネットワーク」が多く語られるようになったのは、世界華商大会の動きが一つの大きなきっかけであったといえるであろう。世界に散らばっている華商が定期的に集まり国際会議を開いて、ビジネスなどの情報を交換するという動きは、世界的な「華人ネットワーク」が形成されたのではないかという印象を人々に与えた。

世界華商大会の活動は、脱国家的な色彩がきわめて強い。華商大会は「華」という語が付けられているため、「エスニック」や「血」の繋がりで形成され、排他性を持った組織であると見られている。しかし、その本質は、むしろ多文化主義的であり、グローバルな性質を持ち他のエスニック・グループに対しても包容性の高いものである。それを現実を表す例として、特に興味深いのは、非華人である韓国人が世界華商大会に出向いてネットワークに参入し、「中華」の繋がりを利用してビジネスを広げようとしていることである。

これでも華人ネットワークか

韓国は、官界、財界、学界など各分野の人々を集め、韓国の経済について議論して行くなかで、今後の韓国経済において、華人資本を勧誘することは発展に繋がる一つの方策であるという結論に達した。その結果、韓国の各界は研究を進め、韓国においてもともと華僑が多かったソウルの中心地と、これも華僑が多くしかも港町として国際的なハブに成り得る仁川に「チャイナタウン」を作るという構想を打ち立て、二二世紀の初期に完成させるとの目標を掲げ、韓国の政府を筆頭に積極的にプロジェクトを進めている。そうした動きの一環として、韓国側は一九九九年一〇月、オーストラリアのメルボルンで第五回世界華商大会が開催された際に、多くの代表を派遣し、華商の投資を勧誘した。

この動きは、まさに、世界華商大会が華商のみに限られた排他性を持つものではなく、非華人系も参入してネットワークを活用できることの具体例である。しかも、このケースに見られることは、「華人ネットワーク」を利用しようとしているのは華商ではなく、非華人系であるという事実である。経済的な共通の利益が模索される場合、エスニックの壁は越えられるのである。実際、世界華商大会を通じてビジネスが成立しているのは、非華人系ビジネスマンとの

ケースが少なくない。しかし皮肉なことに、世界華商大会は「華人ネットワーク」の代表と見られ、「中華」のエスニックな一面がまず前面に浮上してくる性質がある。また、観察者側も華商を「エスニックな繋がりをベースにしている」という固まったステレオ・タイプを持っていては、上述のような非華人系との繋がりとという世界華商大会の「意外な」実態を見落としてしまいやすい。

韓国チャイナタウン建設計画で動いた人脈

韓国側はチャイナタウン建設のプロジェクトを進めるため、あらゆるネットワークを利用して、マクロな視点からは世界華商大会への働きかけが見られたが、ミクロな視点からも極めて脱国家的な色彩が強い。

在日韓国人である李氏は、ソウルにおいてチャイナタウン建設構想があることを知らされ、投資家を集めるよう依頼された。名古屋においていくつものパチンコ店を経営している彼は一定の財をなしており、ビジネス・ネットワークを持つていると思われるからである。そんな李氏は、同じパチンコ業界のビジネスに従事し、台湾において関連の事業を進めている小川氏を一つのターゲットとした。かつて小川氏は台湾の大学に留学し、その際に知り合った日本の華僑と結婚しており、妻（小川女史）の実家が横浜でレストランや国際貿易会社を経営していることを李氏は

知っていた。よって、李氏は同プロジェクトへの投資を勧誘するため横浜中華街に向いた。プロジェクトについて話が交わされた後、小川女史の家族企業の経営に携わっている者が現に他の用事でソウルを訪問した際に投資地区の下見を行い、投資するか否かを検討したという。

ここに見られるように、韓国チャイナタウンのプロジェクトが進められる上で、さまざまな繋がりが活用されている。つまり、一つのプロジェクトを実行することによって共に得られるであろう利益のために、多くの繋がりが重なり網の目をなし一体となっている。それは、在日韓国人である李氏とチャイナタウン計画を掲げる祖国の繋がりをはじめ、彼と小川氏の業界の繋がりが、そして小川氏と妻の出身校の繋がりが、小川女史が家族企業と持つ家族としての繋がりが、また小川女史と李氏の日本におけるマイノリティとしての繋がりが、そして小川女史と同プロジェクトの「中華」の繋がりなどなど、韓国の「華」を用いたチャイナタウン建設のビジネス計画をもとに、多くのミクロなネットワークとアイデンティティが結集されているのが分かる。

もし、彼らの間で共通の利益が模索されたならば、こうしたさまざまな繋がりは、微妙に重なり合い、曖昧な違いを残しながらも、一つのマクロなネットワークとなり、国境を越えて、韓国のチャイナタウン計画に参画するようになるのである。それはまるで、多様な色で微妙に重なった

虹が一点から、もう一点に届く橋のようである。

現代社会は情報化が進み、人や物の流れが頻繁になって行くなか、国境が持つ意味は冷戦時代と異なってきた。政治的な主権の主張のみではなく、経済面における共通の利益の模索がより重要視されるようになってきている。そして個別の民族は、文化の独自性を強調することによって、他者を排するのではなく、むしろ違いを認めながらも共生していくという柔軟性が求められている。韓国人が中国の市場を見込み、チャイナタウンを建設し、中華文化の発揚を通してビジネスチャンスを獲得しようとする動きも、そうした柔軟性の一例である。そして、ここに見てきた、世界華商大会の動向、そして韓国のプロジェクト実現のため、李氏をめぐるアイデンティティとネットワークにも、国境や文化の差異を乗り越え、グローバルな視点で共通の利益を模索するという現実の様子が表れている。

(二) スポーツを通じて越境する 政治・経済的仲介者Ⅱ程萬琦

華人のネットワークは、極めて個人的な繋がりで成り立っている。ここでは、華商がいかに個人の活動を通し、さまざまなボーダーを越境し事業を広げているか、典型的な例を見てみたい。

華商である程萬琦はビジネス界のみではなく、アジアの



アメリカ・ロサンゼルスの中華街に建つ牌樓

スポーツ界においても名を馳せている人物である。程氏は香港に在住しているが、香港で過ごすのは一年のうち長くとも半年ほどであり、大半は世界中を移動している。地球の裏側をほんの隣町のように訪れる行動力が示すように、彼は空間に対し独特の感覚を持っている。彼は世界を自由に飛び回ることにより地理的に広範囲をカバーしているばかりではなく、ビジネスにおいても多くの業種に従事している。程氏は香港において貿易業、フィリピンでは鉱業、オーストラリアでは不動産業を経営してきた。そして、一九八〇年からはアメリカにおいて東方銀行を創設し、金融

業にも従事するようになる。また、一九八二年からはアメリカとヨーロッパにおいて貿易会社を設立し、貿易業務を通じてヨーロッパにもビジネス網を広げる。なお近年、程氏は世華国際交通能源投資グループを設立し、中国内陸における投資活動をも進めている。また、彼は紳宝という自動車会社の華北地域の代理を行い、また湖南省中冠自動車関連の合併会社のビジネスにも携わっている。

ビジネス舞台と化すスポーツグラウンド

すでに述べたように、程氏はビジネス界のみではなく、スポーツ界においても活発な活動を行ってきた。一九五七年香港で開かれた大学生のスポーツ大会（全香港大專運動大会）では、七枚もの金メダルを独占した成績を持つ。「本当はスポーツ選手になりたかった」と昔を振り返る彼の口調から、彼がかなりのスポーツマンであったことを察することが出来る。学生時代はバスケット選手として活躍し、キャプテンを経て卒業後はコーチとなり、そして監督を歴任した後、さらには香港バスケットボール協会主席としてスポーツ界の活動に従事してきた。彼がスポーツで培った行動の機敏さと体力のゆえか、彼はスポーツグラウンドを離れても、あちこち（地理的にも・分野的にも）をすばやくそして積極的に走り回っている。彼の機転の早さと柔軟さゆえに、彼を単独のサークルのメンバーとしてカテゴライ

ズすることは難しい。むしろ、程氏個人がいかにネットワークを切り開いているか、それはどんなアイデンティティを基礎にしているのかに注目してみたい。

程氏は「虹のメタファー」でいえば第七のカテゴリ^⑤にあたる趣味の繋がりであるスポーツ界に三〇年間従事するなかで、さまざまな活動を行ってきた。香港バスケットボール協会主席を務め、そして、三二か国の参加国を持つアジアバスケットボール連合会の副会長、会長を歴任した。彼はスポーツを通して国際交流をはかることを掲げ、自らイニシアティブを取り、世界バスケットボール連合会を結成して副会長を務めた。バスケットボール以外にも、世界テコンドウ総会の副主席を務めた経験を持っている。こうして、彼の趣味であるスポーツに関連した活動のため、世界中を忙しく飛び回っている。そして、こうした活動から自然に世界各地に人的ネットワークが形成され、また多くの情報が入るようになった。彼がアジアをはじめ、アメリカ、ヨーロッパなど、世界各地で手掛けているビジネスは、こうした情報網に支えられており、また各地を飛び回る際に得たアイディアから派生している。以上に見られるように、彼は世界に張り巡らしたスポーツ分野、ビジネス分野をはじめとする繋がりをもとに、彼自身のネットワークを築いている。一年の内半分は海外で過ごし、すでに百か国以上を訪れ、年に数十回は香港を飛び立つという程氏は、

彼の軽いフットワークで世界を活動舞台としており、国境に制約されないバイタリティに満ち溢れた華商である。

程氏を取り巻く世界としての「中国」と 政府としての「中国」

程氏は広西とベトナムの境にある小さな村に生れたベトナム華僑である。八歳までベトナムで育ち、一九五四年香港に移住する。彼が最も尊敬している人物は祖父であるという。彼の祖父程璧金氏は、清朝末期、秀才であることで知られ、また、孫文の思想に共鳴し、革命運動に積極的に参加した人であったそうだ。「孫文の秘書として働き、孫文の思想や見識を身近で、しかも深く習得した人である。彼は孫文の死後、中国大陸を離れて香港に渡り、教育活動に従事した」と程氏は祖父について語る。程氏がベトナムを離れ香港に移り住んだ際、九龍に住む祖父母と共に暮らし、祖父の影響を多大に受けて成長した。「人間は自力更生することが最も重要である。何かに頼ってはならない。一個人が一つの能力を持っているなら、それを発揮し、むしろ社会に貢献しなければならない」と祖父が口癖のように彼にいつていた言葉が、彼の人生に大きな影響を与えたと振り返る^⑦。

祖父は孫文を追隨し、その秘書を務めるように忠誠な国民党員であった。一方父は胡耀邦と密接な関係を持ってお

り、共産党員としてスパイ活動をしていたと程氏はいう。

彼は幼い頃から家庭内において中国の内乱を身近に経験してきた。政府の分裂ゆえに、国民に与える不安感と混乱を常に体で感じてきた。その影響か、程氏は「中華民族」としてのアイデンティティを強く持ち、時にエスノセントリックな発言をするにもかかわらず、特定の政府に帰属意識を持つこともなければ、加担することも避け中道を守りつづけてきた。彼の華僑としての立場が、それを可能にさせたのである。彼は「どこかの国や政府に頼ってはいけない。自分で自力更生する能力を持つてゐることが何よりも大切である。自立することによって自由な立場を獲得し、その柔軟性を活かして社会や政府に貢献することが大切である」と自己の人生経験から体得した人間の存在意義、そして国家政府に対する個人のスタンスを語る。

北京では江沢民、台北では李登輝、シンガポールではリー・クワンユーというように、各政府のリーダーとの写真や高官達から贈られた書が飾られている程氏のオフィスを眺めても、彼が中道で柔軟な立場を持つてゐることが確認できる。彼はあらゆる政府、政党、業界と一定のコネクションを持つてゐるが、それは、彼が華商であることによつて有する多重で曖昧なアイデンティティを、時と場合によつて巧みに使い分け越境してきたからこそ実現できたのである。

経済・文化交流による橋渡し

彼はビジネス界でのネットワークと彼自身の基金を用いて、早い時期に、台湾大陸海峡兩岸經濟貿易懇談会を香港で開催し、台湾海峡兩岸の交流を促進している。また美(米)国華商大陸投資代表団を率いて中国大陸を訪問し、江沢民や李鵬と接見した際、米国と中国の經濟交流を働きかけた。あらゆる政府とも一定の距離を保ち、加担しすぎないことによつて自分の活動空間を広げ、そして社会の橋渡しに努めてきた。その際、ビジネス界に加え、彼のスポーツ界での活動が便利なツールとなった。スポーツ界は文化組織としてニュートラルな立場を保持することができ、しかも、彼が世界に持つスポーツ界のネットワークは各国の文化交流を促進した。

もちろん、中道であることで常に社会と良好な関係を維持できるわけではない。中華民国と中華人民共和国という「中国の正統政府」を主張する「二つの中国」が緊張した関係にあった一九七〇年代、彼はアジアバスケットボール連合会において、両方のチームが同じグラウンドで試合することが実現するよう働きかけた。当初、中華民国のチームが「中国」を代表していたが、一九七五年バンコクで開かれた会議において程氏は中華人民共和国の参加を承認する署名をし、多くの台湾側の友人から反発をかった。彼は「決し

てどちらか一つを選ぶとしたわけではなく、むしろ、両者が交流し対話する場を増やしていくべきだ」と思い、中華人民共和国の参加を承認したのである。しかし、両政府とも他方と共存することを拒否し、程氏の願いは達成されなかった。「われわれ中国人は賢く、勤勉であると評価されている。しかし、残念ながら、あまり団結力がない。この欠点を乗り越えることが大切である」と程氏はいう。また、彼は世界を飛び回る際、各国の華人コミュニティを訪問するたびに、実は世界の華人があまり相互に交流しておらず、しかもお互いのことを知らないという現実に気付いた。こうした中国系人の欠陥を補い、世界的に団結することはできないかという程氏の長年の思いが、世界華人協会の結成に繋がるのである。

世界華人協会の結成

世界華人協会の名称を見ても分かるように、それは華人の組織であるということ以外になんの特異性も有していない。しかし、かえってこれが特徴であったりする。なぜなら、華人組織は地縁、血縁、業縁などの繋がりをもとに結成されるのが一般的であるが、世界華人協会に関してはこうした限定を設けていないのである。筆者がこれまで直接華人組織に参入したり、調査してきたなかで受けた印象は、華人組織は表向きに掲げている看板（名称）に比べ、実際

の組織内部の構成が緩やかであり、極めて開かれたものであるという点である。例えば、陳氏宗親会を例に挙げて見ても、本来、陳氏宗親会は、陳という姓を持つ「限定された者」のみによって結成される組織であるはずだが、陳氏以外の者の加入も可能であり、実際、世界大会などにおいては、陳氏以外の人々が多く参加している。しかも、近年新たに設立されている華人組織は、よりグローバルな視野を持ち、経済利益追求の性質を有し、自由度の高い傾向を持つ。血縁や地縁、業縁などを限定しないのは分かるが、程氏が設立した世界華人協会のように、分野、そして地域さえも限定していない華人組織は実に珍しい。

世界華人協会は非政治的、非宗教的な団体であり、平和と友好の趣旨の下に全世界の華人を繋げ、世界の民族の平和共存を最終目的としている。そして、その宗旨は、第一に、世界各地の華人を繋げ、一致協力して中国固有の優秀な伝統文化を発揚すること、第二に、世界の華人の力を集結し、華人の工業・商業を発展させることで、華人の所在国・地域の経済の繁栄に貢献し、現地の社会の安定を維持し現地政府の法原則に従うこと、第三に、世界華人の所在国・地域の政府が現地の華人が享受すべき一切の合法的権利と生活を保護するよう促進させること、などである。世界華人協会は、中国の一三億の人々、そして中国国外にいるといわれている三千万ほどの華人を対象にしている。世界

に散らばる中国系人を團結させ、そして彼らの權益を守る⁽¹⁾ことができないかとの発想から同協会は結成されている。

程氏はこのダイナミックなプロジェクトの立案者であり、こうした思いを抱き始めてから、彼は世界を巡り一二年という長い準備期間を経て、一九九二年によく世界華人協会の設立にこぎつけたのである。

越境と共存——「華人は非華人の人々との共存があつてこそ意味を成す」

世界華人協会が設立されるまでの過程、彼は彼自身の軽いフットワークと積極的な態度、そして説得力のある人生経験などを活用し、ビジネスやプライベートで世界を飛び回るたびに宣伝活動を行った。ここでも、政界、財界そしてスポーツ界における彼の個人的なネットワークをベースに支持者を集め、協会設立の準備を行った。同会は内外の華人の反響を呼び、香港返還後の初代特別行政長官である董建華⁽²⁾など香港の政界・財界、そして芸術界の人々を結集した。程氏の思いはただ、政治的信条や出身地、血縁など何一つ分け隔てのない華人組織が成立し、それによって華人が團結し、彼らの生活の安定が促進さればということであつた。「華人の團結」というと、排他的であり、非華人の人々にとって脅威になるのではないか」という筆者の質問に対し、程氏は「そのような心配はなく、華人は非華人の

人々との共存があつてこそ意味を成す」と答えた⁽³⁾。また、世界華人協会は「非政治的な団体であり、メンバーの相互補助を第一の目的とする。そして、経済や文化のチャネルを通じて、中国と台湾、そしてさらには華人の居住国との交流を深めるために働くことを目的としている」と語つた。以上に見るように、程氏は彼の柔軟なネットワークとアイデンティティを利用し、橋渡しのためにさまざまなボーダーを越境するのである。

二世代が共に演じる「一人数役」

筆者はインタビュー取材のため香港の九龍にある程氏のオフィスを訪れた。インタビューの前後や合間に秘書が程氏に伝える伝言、彼が応対する電話での会話、そして、見せてくれたデスクに並べられている彼が率いる各組織やビジネス・プロジェクトの書類、さらには前にも触れた壁に掛けられている各高官との写真や贈られた書画など、限られた時間と空間のなかでさえも、彼が単独の政府や組織に縛られず、多様なネットワークを持っていることが確認できた。

また、筆者がインタビューを行っていた間、程氏がマカオにも強いネットワークを持っているということを聞きつけ、彼と合弁を組んでマカオで新しいビジネス・プロジェクトをはじめたいとロサンゼルスと福建省からやつてきた

華商たちが待合室で待っていた。筆者が偶然にもマカオ返還の状況について質問をすると、彼は別室で彼を待つパートナーを紹介してくれ、一九九九年末のマカオ返還を控えて、中国資本やアメリカの華商資本との合併によりホテル業をはじめとした新しいプロジェクトが進んでいることに触れた。また、「ビジネス・パートナーと共に昼の会食をするので一緒にどうか」と気さくに筆者を誘う様子など、一時間半ほどのインタビュウの間に、彼の多面的で広範なネットワークの所有に加え、物事の処理能力の迅速さと対人関係における柔軟さを見せ付けられた。率直にいうと「この人は一体、一人で何役を演じているのか」と思われた。

程氏の娘でアメリカ留学から香港に帰ったばかりであるメーブル女史は、筆者が程萬琦氏とインタビュウを行っていた間臨席し、父のアイデンティティや人生経験、携わるビジネスの事業内容、そして父が持つネットワークについての話を横で静かに聞いていた。父が有する「中国」に対する誇り、多重で柔軟なアイデンティティ、そして世界に広がるネットワークと比較し、新しい世代である彼女は香港に生れ育ち、アメリカで経営学修士(MBA)を取得しており、ネットワークを広げるという意味では語学力の面でも、環境の面でも、父より良い条件にあるといえる。しかし、彼女は自分が「香港人」として、より一元的なアイデンティティを有し、父のようなネットワークは持つてい

ない」という。しかし、彼女はアメリカ留学中、アジア・ビジネス・クラブや中国留学生が主催する非政府組織などに積極的に参与し、同組織が主催するアジア金融危機に関する会議において、マーケティング・ディレクターとして顕著な働きをしていた。同会議は一九九八年五月、ハーバード大学において行われ、エズラ・ボーゲル氏など学会で著名な教授や世界で有名なエコノミスト、そしてアメリカ中国大使館のリー大使(Li Zhaoxing)など、政界の者やアジアの財界人など世界から多数の人が参加した。程氏も会議のスポンサーとなつたばかりでなく、香港から会議に出席した。

意図せざる結果と観察者

メーブル女史の活動を観察しても、彼女は確かに「香港人」というアイデンティティを所有しているが、彼女が中国留学生の組織に参加していることから「中華」的な繋がりと出身校の繋がりを所有しており、またこうした繋がりと彼女が持つ家族(父)とを繋ぎ、彼女の専門でもあるビジネスに関する会議を行うことで、国際的な活動に役立っていることが分かる。前にも触れたようにメーブル女史の発言から、彼女自身は自分と香港の繋がりのみを意識し、それ以外の繋がりを意図していないことが確認できるが、彼女はすでに彼女が所有するさまざまな繋がりとアイデン

ティティを活用し、国際社会の橋渡しをしているのである。

このように、華僑華人のネットワークとアイデンティティは、しばしば意図されずに形成されることが多い。また、ネットワークが存在するかどうかは、観察者の視座とも関連している。メンバー女史自身からすれば、ネットワークを築くことを意図してもしなければ、ネットワークの存在にも気付いていないのである。しかし、筆者や第三者などの視座によつては、彼女が持つ繋がりが果たした役割を「華人ネットワーク」として捉えることもできるのである。これはまさに、「虹のメタファー」で表される華僑華人と外部世界とのダイナミズムの具体的な例である。虹は、それを見る者の角度によつて出現したり消えたりするように、「華人ネットワーク」も見る角度によつて、存在すると捉えられたり、はたまた存在しないと認識されたりするのである。メンバー女史と外部の者が持つ彼女のネットワークに対する認識の差異は、まさに虹をどの角度から見るかという視角や光線の角度の差異に相当する。香港に戻りビジネスに携わる彼女が、今後自己の立場をいかに認識し、そしてそれをいかに操作して自分なりのネットワークを築いていくのか、今後も注目に値する。

二 華僑華人への視角

(一) アイデンティティの重層性

虹が七色の層によつて形成されるように、華僑華人は一人のなかに多重的なアイデンティティを有している。そして、虹のグラデーションのように、彼らのアイデンティティは曖昧で融合したものである。彼らは華人としてのアイデンティティを持つているのと同時に、「中華世界」から離れた環境におけるアイデンティティをも有している。つまり、自分がいつ、どこに、そして誰といるかによつて、違ったアイデンティティの軸が取り出され、他者と繋がりを形成する。例えば、ある華商は同時にアメリカ人、華人、広東人、李家の者、マサチューセッツ大学出身者、コンピュータ産業界の者、キリスト教信者、テニス愛好家としてなど、さまざまなアイデンティティを有しており、それぞれの場面によつて、異なった人々と繋がりを形成している。個人は、しばしば、自己が持つ多重的な役割やアイデンティティを意識しておらず、時や場所、パートナーによつて、自己の振る舞いや役割を変換しているのである。このことはまた、観察者が華商を見ると、どの次元でその人物を語っているかによつてイメージが変化することと同じである。

アイデンティティの重層性は、華商が居住する社会の多様性と、歴史を越えて生き続ける華人社会が交錯するなかから生れてきたものといえる。つまり、移住し同化したからこそ、居住国の国民意識が生れ、彼らが生活する社会が複合社会であるからこそ、華人というエスニック・アイデンティティが有効性を持ち、そして、華人の出身母国の歴史的地理的空間が巨大であるからこそ、広東人、福建人や李氏、王氏というグループ・アイデンティティが、自分たちをさらに識別する価値基準として機能しているわけである。また、技術や情報の発展によってグローバル化が進み、地域間の移動や異文化間の交流が頻繁になったことによって、文化の差異を越えた専門領域や信仰、趣味における繋がりが形成され、連帯感を構築し、サブ・アイデンティティとなるのである。

重要なのは、彼らが他者と構築している繋がりと連帯感、意図的に形成されたものではないということである。信用を重んじ、人との関わりを大切にすること、人間関係が資本となって毎日の生活に活用されることは、彼らが伝統的に有してきた倫理精神、社会的規範であり、また移民としての生きる術なのである。

だが、そうした華商がもっている繋がりは、しばしばエスニックな色彩が強調され、彼らは中華的な繋がりでネットワークを築き、そのネットワークは排他的な性質を持つ

ているという印象を持たれている。しかも、近年の華商資本の成長とともに、中国市場の開放とアジアにおける華商の中国投資の増加により、世界に散在する華商のディアスポリックな繋がりが中国と一体化し、「大中華経済圏」を形成するであろうという「中国脅威論」にまで発展している。

しかし、ここで注意すべき点は、すでに述べたように、華商は決して中華アイデンティティのみによって自己という個人を形成しているのではなく、多重なアイデンティティを持つており、それを取捨選択することによって多様なネットワークを形成していることである。しかも、華商である彼らは、商人であるがゆえに経済合理性を優先する性質を持つている。すなわち、彼らはエスニックな繋がりによりも利益を重視するというゲゼルシャフトの傾向を持つている。したがって、「経済の論理」は華商を動かす重要な要素であり、彼らはエスニックな愛着のみでは動いていない。近年、中華の色彩が強く現れているのは、中国市場の潜在力など、「経済の論理」とエスニックな色彩が重なったためであり、むしろ、エスニックな繋がりを利用することに、経済合理性を高める効果があるからなのである。

(二) 視点の置き方

さらに重要なことは、華僑華人が現実には所有するネットワークのあり方と外部の観察者が華僑華人に対して抱くイ

メージの相違である。すでに繰り返し述べているように、華僑華人は強固なネットワークを有し、中国系同士で緊密に繋がっているというイメージを持たれてきた。そして、華僑華人は、世界に散在するディアスポラであるがゆえに、グローバル社会において強力な影響力を持つ者であるという印象を抱かれてきた。しかし、華僑華人は決して一つのまとまりを持ったグループではない。むしろ、彼らのネットワークは個人的なものであり、それぞれ分散している。要するに、「華人ネットワーク」に対するこれまでの認識は

一面的であり、その本質を捉えきれていないのが事実である。なぜなら、これまで、華僑華人たちのネットワークという本来可変的な生命体を、一個の固定化した概念として見てきたからである。しかも、それを平面的に捉え、その立体性やダイナミズムをつかみきれていなかった。

立体的に捉えるという意味で一つの例を挙げて説明したい。多数の円錐を机の上に林立させ、各円錐をいくつかの層に分ける。中心にある円錐Aの第一層と、円錐Bの第一層を線で結び、次に、また中心にある円錐Aの第二層と、他の円錐Cの第二層を線で結ぶ。円錐Aのみすべての層を用いて、他の各円錐の第一層と結ぶ作業を円錐Aの最下層まで続ける。

これらの円錐を側面から見た場合、それは図1のように見えるであろう。では視点を変え、同じ円錐を上部から眺

めると、それは図2のように見えるのである。

なお、これを単純化せず、各円錐がそれぞれに複数の層で、他の円錐と繋がっている状態を考えたい。いくつかの円錐を第一のグループとして最上層で線によって結び、そしてまた他の数個の円錐を第二のグループとして、第二層において他の線で繋ぐ、この作業を最下層まで繰り返す。

こうして、林立させた円錐をある一定の距離を置いて上部から見た場合、それは散在する多数の円から伸びている線がすべて交差して繋がっているように見えるのである(図3)。しかし、これを上部からではなく視点を机の面の高さに合わせて各側面から円錐と線を眺めた場合、それぞれの円錐は、はじめに分けた層ごとに、それぞれ平行して繋がっているだけであり、それが上部から見たように緊密に交差し、大きなネットワークに見えることはなく、実際にある個々の円錐の繋がりがりしか見えないはずである。つまり、これは、視点をいかに置くかによって、見え方が異なり、全体の捉え方が異なってくることの一例である。

本研究において、インタビュー調査や参与観察によって華僑華人に密着し、彼らのネットワークとアイデンティティをさまざまな角度や視点から分析してきた。円錐でいえば、上部からも、そして側面からも、また華僑華人のアイデンティティにあたる円錐の各層の構成をも綿密に分析し、その全体像を捉えるよう試みた。その際、華僑華人の実像と

観察者の彼らに対して持つイメージにはギャップがあることを発見したのである。最後に、外部の観察者が華僑華人に対して持つイメージによって、華僑華人がいかに変容しているかなど、外界と華僑華人が持つダイナミズムについて虹を喩えに触れたい。

おわりに

「虹のメタファー」にみる華僑華人

新生活を求めて海を越えて移民した後、移住先での環境において苦勞に耐え、勤勉に働き、一定の財を成した一部の華商は外部の観察者の注目を浴びた。その結果、すべての華僑華人は強力なネットワークと経済力を持ち、華やかであると同時に手に届かない存在であるという印象を外部に持たれた。それは、まさに虹の現象に喩えることができる。つまり、海や汗、そして涙にもじられる華僑華人が所有する「水滴」に、外部の観察者の注目という「光」が射した結果、それは虹として表れ、世界を跨ぐ多彩なネットワークに見えたのである。目に見えるが、実体がつかめなという点でも、虹と「華人ネットワーク」は共通している。人間はしばしば、自分がいるその時と場所において抱いた印象を固定観念としてしまう傾向があり、一方で、それ

が持つ可変性を見逃してしまうことがある。虹に対する印象も、人間はしばしば、自己の目に映った平面の虹を画像として、半永久的に脳裏に焼き付けてしまう。しかし、同じ時に、虹の真下や側面に移るなど、角度を変えて見た際に虹が見えなくなるであろうこと、また、他の場所では、ほかに複数の虹が見えているであろうことについての認識は低い。

これと同じように、外部の観察者がある一定の角度から華僑華人を見るからこそ、それがエスニックな繋がりを持つ一つの強固な「華人ネットワーク」として見えるのであり、角度を変えて見た場合、華人同士はなんの繋がりをも持っていないかったり、もしくは、他の場所において、複数のさまざまな繋がりで形成されたネットワークが存在していることにまで注意が及ぶことは少ない。

また、虹を形成させる一要素である光線が、一定以上の間水滴を照らすと、やがて水滴を蒸発させ、そして虹は消えてしまうものである。これと同じように、「華人ネットワーク」も、外部観察者の注目を浴びることによって形成されたのであるが、その成功や繁栄などを評価された結果、嫉妬や憎悪が発生し、ネットワークが崩壊するという側面を有している。華僑華人同士が、お互いの繁栄や成功を妬んだり、足を引っ張り合う事態や、一九九八年にインドネシアで発生したように、マイノリティである華僑華人が繁

榮していると見られ、嫉妬が生れて排華運動に引火するなどのように、「華人ネットワーク」は注目を浴びると、しまいにネットワークが機能しなくなるという脆弱性を有しているのである。

それは移民である華僑華人が「潜在的な部外者」であるため、疑いや不満の矛先となり「スケープゴート」となりやすいことを示しており、華僑華人だけでなくディアスポラが持つ「宿命」であるともいえる。皮肉なことではあるが、これは、外部の観察者と華僑華人の両者が意図しないなかで発生する自然の生態であるといえる。つまり、外部の観察者は意識的に華僑華人に対して疑いを持つとうとしているのではなく、また華僑華人も無意識のうちに行った行動が疑惑を持たれるものとなっている。

華僑華人が行っている活動や行動様式がネットワークに見えること、そして、それを見ている観察者がそれを「華人ネットワーク」と捉えてしまうことなど、これらはすべて無意識性のもとに形成された相互作用のなかから生れたダイナミズムの結果であるといえよう。なぜなら、華僑華人が所有する「中華世界」が興味深い特徴を持っているため、多くの観察者は無意識のうちに、その「中華世界」、いわば内向きの世界観を基に華僑華人を分析することにとられ、反面では、ディアスポラの一員である華僑華人を持つグローバル社会に広がる外向きの世界に注目することを

怠ってきた。それゆえ、外部の観察者には、華僑華人が「中華世界」に属する同じエスニック集団の間だけでネットワークを築いていると見えてしまいがちなのである。

こうした無意識性の相互作用には、しばしば、民族文化の差異や国家的な利害によって生じる誤解や私欲が存在するため、悲惨な結果を生み出すことになっている。こうした、問題を解決するためには、異文化間の誤解や自己の欲望を剥き出しにするという欠陥を補修しなければならない。特に、グローバルゼーションが進行する現代社会において、こうした問題への対策は急務であるといえよう。そのためにも、われわれは、自己の他者を見る視角が客観的かつ正確であるかを、常に問い続けなければならないだろう。「華僑学」という新しい研究の枠組みを構築することが唱えられているが、華僑華人を見つめる一つひとつの目にも、同じ責務が課されている。

注

- (1) より詳しくは拙稿「虹のメタファーに見る華商ネットワークの本質」『アジア研究』第四八巻第一号、二〇〇二年一月、三七―五九頁。
- (2) 一九九九年一〇月、横浜において小川女史とのインタビューにて。
- (3) 「国際体育投資商——程萬琦伝奇」『中外商務』一九九

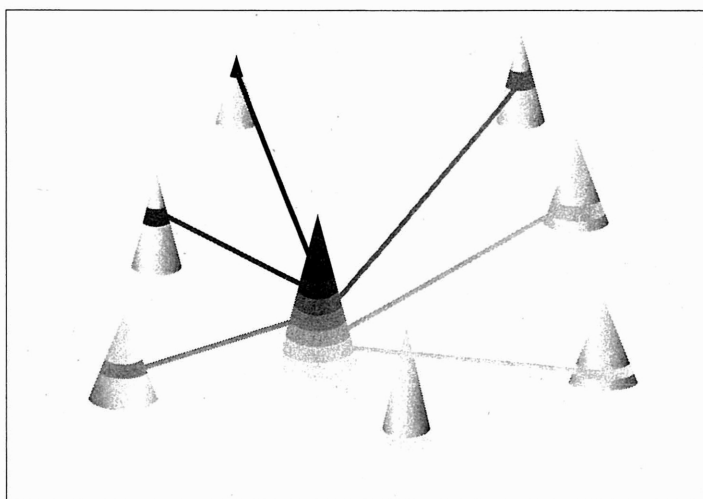


図1 横から見た円錐 A と他の円錐の各層の繋がり

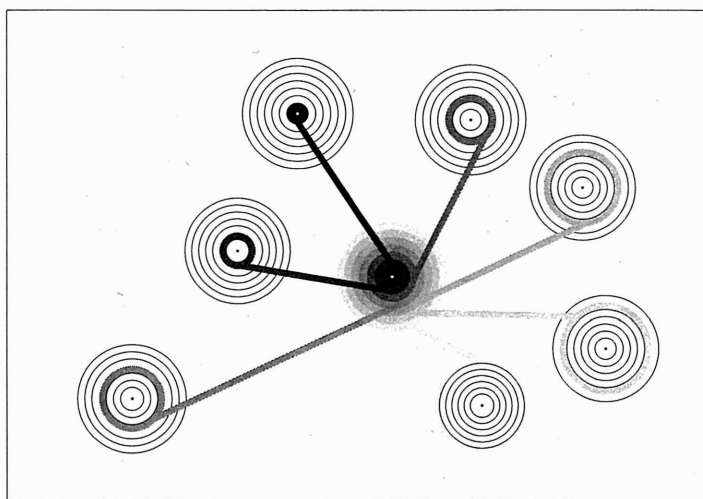


図2 上から見た円錐 A と他の円錐の各層の繋がり

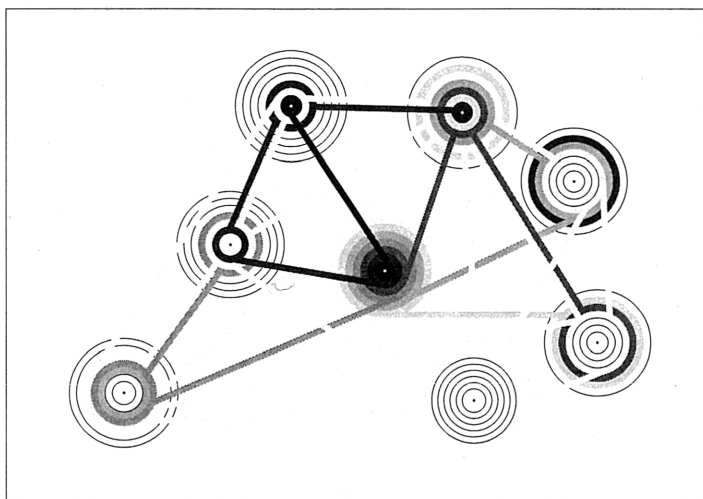


図3 それぞれ円錐が、さまざまな層で繋がっている状態を上部から見た場合

八年四一五期（総第四〇期）、一五一一六頁。

〈4〉一九九九年一月、香港において程萬琦に対するインタビューにて。

〈5〉「虹のメタファー」は、華商のネットワークとアイデンティティの構成要素を虹にちなんで七つに分類しており、その繋がり第一のカテゴリから順に、(1)居住国、(2)「中華」文化、(3)出身地、(4)「家族」、(5)出身校、(6)同業者、(7)信条や趣味そして余暇の繋がりである。注(1)を参照されたい。

〈6〉同注(4)。

〈7〉「凝聚全世界華人力量」『文匯報』一九九八年二月二十六日。

〈8〉一九九九年一月、香港における程氏に対するインタビューにて。

〈9〉同右。

〈10〉一九九二年、タイ・バンコクにおける世界大会、一九九三年フィリピン・マニラにおける世界大会、一九九六年台北における大会、一九九七年マレーシアにおける大会など、ワールドワークにて観察。

〈11〉「世界華人協会成立——団結爭取全球華人權益」『華僑日報』一九九二年八月二十九日。

〈12〉「世界華人協会昨聯歡海內外知名人士參加」『華僑日報』一九九二年九月二日。

〈13〉一九九九年一月、香港における程氏に対するインタビューにて。

〈14〉一九九九年一月、香港において程氏にインタビュールた際、紹介されたアメリカの華商三名および福建省のビジネススマンとの交流にて。

〈15〉一九九九年一月、香港において程氏と共にメーブル女史に対して行ったインタビュールにて。

〈16〉一九九八年五月、ハーバード大学ケネディー・スクールにおいて「アジアの金融危機——挑戦と機会」(The Asian Financial Crisis: Challenge and Opportunities) をテーマに開催された。